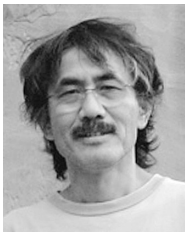
巻頭エッセイ

理想の教師はミック・ジャガー



佐藤良明

「英語は実技科目，体に覚えさせなくてはダメ」とわたしもよく言うのだが，ただ言うだけでは無意味である。実技というならどんな実技か。音楽のようなものか，体育のようなものか，それとも演劇のようなものか。広く類比をたずねながら，具体的に説いていかないと，生徒の役には立たないだろう。

学習者の頭と心と体の全体に対して，われわれ教師はどう働きかけていくべきなのか。問題は単に「英語」にとどまらない。国語，音楽，体育，その全体をひっくるめて，教育における身体の問題を，もっとまともに引き受けるべきではないかと思うのだ。

わたしの自由になるなら，わたしは国語に落語を入れる。小学生のうちがいい。古典落語など，子供はすぐに覚えるものだ。『声に出して読みたい日本語』という本が流行ったけれど，「祇園精舎の鐘の声……」の類だけじゃなく，落語や漫才に受け継がれた，豊かな日本語のしらべを子供たちが感じ取り，吸収できる環境作りこそ整えていきたいと思うのだ。

音楽の時間には，ドラムセットが必要だ。クラバスもグィロもコンガもみんな買い込んでマンボをやろう。4つ打ちのバスドラに合わせてディスコを踊って，そのまま八木節に流れ込もう。伝統の小節回しをみんなで習って，氷川きよしにチャレンジだ！

わたしは過去数年，東大駒場でロック・ブルース・歌謡曲を中心にポピュラー音楽の講義を行ってきたが，音楽を「講義」することの空しさを感じてしまい，少人数のクラスを担当した昨年は授業の演題を〈Sing America〉とした。1840年代のミンストレル・ショーのナンバーから，カントリーやジャズ・ボーカルの名曲，ブロードウェイのスタンダード，ロックンロール，最後の締めはアース・ウィンド＆ファイアーの「宇宙のファンタジー」。セミプロの実力をもつ院生のギタリストやキーボーディストが一緒に参加してくれたため，とても楽な授業となった。

「それが大学の授業ですか？」と呆れられもするが，日本語や英語や音楽について，verbal に記述できることだけを集めて学習項目をつくり，それらを頭で覚えた子を優遇するというやり方は，われわれの生きる社会のしくみに，すでに合わない。「英語の授業」という名で今なお継続している，「できる子」と「できない子」を峻別するための膨大な労力を，もっと音楽的・体育的な方向へセットし直すべきである。

わたしがひそかに企んでいるのは，「ビート・パターンで分類した英語フレーズ集」の制作である。「強・強」のツービートの項には，“That’s right.” や “You’re wrong.” が並ぶ。これを授業で教えるには打楽器があるといい。“That’s not right.” ではドラムをダン・ダン・ダンと3つ打つ。日本語なら「そりゃ・ちがうで・しょ」の3拍がこれと等価だ。

近代（エリート階級の時代）に標準とされた英語は，クラシックのメロディのように，高低のイントネーションが重要だったが，現代（映像音響の時代）の英語はロックのように，ビートの置き方が表現上のポイントとなる。“Start me up.” は「強・弱・強」だが，その記述だけでは不十分。2つめの強拍 up は「拍を食う」ようにシンコペートして（つまりウラ拍で）発声する。これを教えるなら，やはりローリング・ストーンズのコンサート映像を見せて，みんなで右腕を突き上げながら練習するのがいいだろう。

（さとう　よしあき・東京大学大学院教授）